

23日、平成17年5月実施されたファイナンシャルプランナーの試験結果が発表になった。お陰様で、目出度く合格する事が出来た。正直な所ほっとしている。会社の者は多分に小生が勉強している事を承知していただろうし、後輩諸官には言わなきゃいいのにおしゃべりでもないのに話してしまった。家族は当然承知していた。という訳でホッとしているというのが偽らざる心境である。



これからは、名刺に「日本ファイナンシャル・プランナーズ協会認定 AFP」「2級ファイナンシャル・プランニング技能士」を刷り込む事ができる。ちょっとは自慢出来るかな。

思えば、一年近い期間の勉強であったが、今まで全く縁のない分野に関する勉強でもあり、且つ年齢60歳になんなんとする者には聊かハードであった事は事実である。まさか最高齢の合格者という事はないが、試験会場で廻りを見渡した限りでは小生よりも年長と思しき者にはお目にかからなかったのも事実である。ともあれ、久し振りに勉強したかなと言う気がする。選抜試験ではなく資格試験であるが、最近の合格率を見てみると低下傾向に在り難しくなりつつあるのかもしれない。

近年,FP(ファイナンシャルプランナー)のニーズが高まりつつある。一つには少子高齢化社会の到来であり、金融の自由化やビッグバンの進展、個人の金融資産の増大や超低金利時代、将来の社会保障に関する漠然或いは明確なる不安の増大等の色々な要因があるだろう。

かかる時代にあっては、一般庶民においても、己の財産を如何に自己防衛し、如何にして将来のリスクに備えるか、その為のアドバイスを切実に求めていたのであろう。米国の保険募集人が提唱したと言うライフプラン設計を基にファイナンシャル・プランナーが誕生したのであるが、それも時代の要請であろう。

小生は偶々と言うべきか保険会社に第二の人生を求め、その会社がライフプランを基本とした保険募集をしていたこともあってFPに関心を持つようになった次第である。今までの自衛官と言う人生とは全く馴染みのない、どちらかといえば家内に任せっぱなしでもあった分野であり、天下国家を考える者が財産だ資産運用だ、云々に拘わりあうものではないという意識が根底に在ったのも事実である。

然し、定年を迎え、これからの人生を考えた時、矢張り自己責任から免れる事は出来ない。然らば、一般社会人にとって常識事項でもある分野を網羅している事項を勉強しなければ今後の人生に展望が開けない(と言うと大袈裟だが、...)との気持ちから勉強しようと思いついたのであり、ボケ防止にでも役立つかとの思いがあったのも事実だ。そういう意味では頭の体操には充分過ぎる位であり、大いに刺激も受けたし、新たな知識も得た。

有り難い事だ。脳細胞が相当数再生された筈だ。

が、実際に勉強してみるとこれが意外に大変だった。こんな筈ではないと思いつつも己の記憶力に無さに落胆もしつつどうにか合格となった次第である。また、独学と言うのは結構大変だ。アドバイスをしてくれる者も居ない（と言うより、敢えて不要と変な気負いが在った？）、先生もなしと言うのは予想以上に厳しい。やや甘く考えて、なめてかかっていたのかも知れぬ。自負心が強すぎるのも考え物だ。

FPのカバーする範囲は広すぎる。① 金融資産運用 ② 不動産運用設計 ③ ライフプランニング・リタイアメントプランニング ④ リスクと保険 ⑤ タックスプランニング ⑥ 相続事業設計 である。

尚、FPに求められる具体的な識能として、次のように記載されている。

- 顧客に対してファイナンシャル・プランニングを行うための基本的なインタビュー技術、提案書の作成技術、プラン実施援助のための諸知識を有している。
- 顧客に対してファイナンシャル・プランニングを行うための、ライフプラン、金融、証券、保険・年金、ローン、不動産、税金等の幅広い基礎知識を有していること。
- 顧客を指導、支援する上で、ファイナンシャル・プランナーとして必要な経済、法律、税務の一般知識を有していること。
- ファイナンシャル・プランナーとして、顧客の利益を最大限に守る高い職業的倫理観を有していること。
- 社会的職業人にふさわしい教養、知識を有していること。

(●印：FP協会HPから引用)

以上に列記してある基礎知識は、情勢の変化に応じて改正・改善される。従って、FPたる者はこの時代の変化に応じて己の知識や技能を高めなくてはならない。不断の勉強が必要だ。それが実学ゆえの厳しさである。従って、己の知識や技能が陳腐化せぬように継続的に勉強すべき責任がある。

既述のように個人的にも役立つ知識やノウハウがあるのも事実だが、それはとりもなおさず後輩諸官や地域の人々に還元できる財産でもある。今は会社の顧問としての任務とマンション管理組合の理事長としての役割で精一杯だが、何れFPが役立つ筈だ。そう信じた

い。  
さて、次に何に挑戦するか、考えなくてはならぬ。